

『最近、AI(人工知能)がますます進化し、私たちの生活や仕事に深く入り込んでいるのを感じています。気がつけば、スマートフォンで運転をサポートしてくれるAI、オンラインで私たちの好みにぴったりの映画を提案してくれるAI、さらには事務作業を代行してくれるAIまで登場し、これから私たちが働く世界はどう変わっていくのか、考えさせられます』
『いつもものように書き始めましたが実は』の部分、私の文ではありません。私の過去の作品を

⑤4 進化するAI



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

学習したAIが作成した文です。
「AIが人の仕事を奪う」という議論がよく取り上げられますが、「本当にそうなのかな?」そんな疑問に挑戦しました。



今年4月に吉本新喜劇の脚本を担当しました。その台本の内容を簡単に説明します。①タイムトラベルの話②AIが発達し、楽しい

話をするので未来には芸人がいない③芸人よりも優れた未来のAIを現代の売れない芸人が手に入れる④未来のAIが生成したギャグを芸人が舞台で使うという設定です。そして、実際に現在のAIが考えたギャグを吉本新喜劇のプログラムの役者さんに実践してもらいました。



結果は、大スベリ…。台本でも「未来のAI全然アカンやん」というセリフで笑いが取れないことを大前提にストーリー展開して

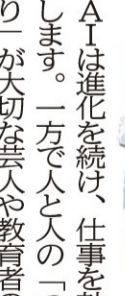
いたので、スベリ笑いは起きていたのですがギャグとしての評価は0点でした。その後もAIが作成した二つのギャグを披露しましたが同様の結果になりました。

「AIのギャグの部分少し変更していいですか?」。2回目の舞台前の打ち合わせで芸人さんから提案がありました。「AIが作成

したギャグはやっぱりウケない」ということを前提として作成した台本でしたが、「AI対芸人のお笑い対決」という構図に興味が出てきたので、「好きなように変更してください」と返事をし、2回目の舞台が始まりました。

結果は、三つのギャグ全てで笑いが起こっていません。完全に笑いはなく、AIのギャグの原型を残した状態の微調整でしっかりと笑いに変えた芸人さんの力に驚きました。

私たちと関わる教育者の仕事も先生にしかできないことがたくさんあるように思えます。



お客さんとの「つながり」や「共感」を大切にしてお笑いの舞台では、AIはまだまだ芸人さんにはかなわないようです。同様に子どもたちと関わる教育者の仕事も先生にしかできないことがたくさんあるように思えます。

まだまだ芸人にはかなわない